

ロータリークラブに期待するもの、そして私の目指すもの

---

呉 佩 紋

静岡産業大学情報学部  
企業戦略ゼミ

現代社会は変化が激しく、皆、豊かな生活を求めて、毎日真面目に働いています。どんなことにもお金が必要ですから、目が覚めたら、全員が頑張らなければいけません。私はロータリークラブの冠講座を受ける前に、そう考えていました。

私の家では自分が欲しいものは、まず自分が手に入れる努力をして、それでも足りないときは、親に協力してもらうことになっています。例えば、子供のころも、玩具が欲しいときや服を買いたいときには、自発的にまず、家の掃除をしたり、お菓子屋をしている友達の家で菓子の包装を手伝ったりして、小遣いを貯めていました。こうすれば、欲しい物も手に入れられるし、お金の大切さもわかります。このように育てられた私は、高等学校に入る時には、とても迷いました。勉強が苦手な私は、無理に進学するのは、時間とお金の無駄だと考えて、結局、私立の夜間高等学校への進学という道を選びました。そして、美容師の専門学校にも通い、勉強しながら、朝は美容室で働いたのです。

これは初めての社会体験でした。給料は少なかったのですが、お客さんに喜んでいただいたり、信頼していただいたりしたのは、非常に楽しい経験でした。学校での勉強も一生懸命したので、一時も休む暇はありませんでしたが、非常に充実した生活をしていました。美容室では二年間働いたのですが、もっと働いて、両親にあまり頼らず、自分でも学費の多くを負担したいと思うようになりました。そして、美容室の仕事をやめました。

当時の私は、夜間高等学校の三年生だったので、普通の会社員のように5時まで働くことは無理でした。ですから、4時に終わるモーター製造会社の面接試験を受け、その仕事に就きました。こうして、最後の一年間を過ごし、無事に夜間高校を卒業しました。この会社では、卒業後も一般の社員のように朝8時から夜5時まで働きました。当初は、モーターの知識など、全くありませんでしたが、この会社で約10年間働きました。

最初はモーターの一番中心の部門、固定子と結線の部門から働き始めました。社長は私のことをよく面倒見てくれました。今考えると、多分私が若かったからでしょうが、ほかの社員たちも優しく、わからないときには、丁寧にきちんと説明してくれました。毎日が楽しくて、働きながらラジオを聴いたり、同僚と話したりして、とても充実した日々でした。

製造部や倉庫に配属されたこともありましたが、それでも、係員の指示に従って作業をやるので、それほど苦労はありませんでした。仕入れの部署に配属されたときは、仕入先と係わる仕事なので、多少苦労があるのではないかと、心配しましたが、ここでも、先輩がいろいろと指導してくれたので、何とか仕事ができるようになりました。材料の仕入れの仕事は単純なものだったので、慣れれば大丈夫でした。

私がこれらの経験で、一番強く感じたこと、学んだことは、自分が自分を大切に、何事も真面目に本気になってやっていたら、周りの人も自分を大切にしてくれ、支えてくれるということでした。

その後、私は、総務（日本では、マネージャーにあたる）に次第に重要な仕事を任されるようになってきました。私にとって一番苦勞しかったのは、生産管理の仕事に就いたときのことでした。社長の命令で、私は突然生産管理に配属されてしまいました。モーター機種のこと、取引先のことよくわからず、本当に困ってしまいました。製造課長が私に、生産表の書き方から教えてくれて、仕事は何とかしていましたが、そのときに痛感したのは、やはり仕事をきちんとすることだけではなく、取引先や仕入先や社内の社員達とのコミュニケーションの取り方が、最も大切なのだということでした。

若くて経験がなかったので、仕入先から協力したくないと言われたときもありました。また、ほかの人に馬鹿にされたこともありました。会社をやめたいと思ったときもありました。しかし、総務は「あなたが泣くのは無駄です。やるしかないでしょう。これは仕事です。」と厳しく言ってくれて、私の考え方を換えようとしてくれました。この言葉を聞いて、私は目が覚めました。そして、私は、毎日胸を張って、女性だから、若いからなどという言い訳はやめて、仕事は仕事なんだと考えて、誠心誠意、ほかの人と丁寧にコミュニケーションをとるようにして、任された業務を行うようにしました。そうした結果、最後には、社員の皆も、仕事の手順や残業をするかどうかなど、いろいろなことを私の承認をとってからするまでになって、認めてくれるようになりました。

ところが、社長は、自分の息子が大学を卒業すると、私が今までやってきた業務全般を息子に任せることにしてしまいました。また、私も若いうちに一度海外へ行って、視野を広げたいと思っていたので、そのことを社長に話しました。すると、社長は私の気持ちを理解してくれて、いいよ、だめだったら、また会社に戻るといいと言ってくれました。親も行きたいなら行ってみなさい、後悔しないようにしなさいと言ってくれ、日本への留学に賛成してくれました。

日本に来てからは、苦しくても絶対に負けないという精神で、日本語を二年間勉強しました。アルバイトを探すときには、その店の店長が、「あなたは何かできますか。」と聞いてきたときは、いつでも、「何でもやります。」と答えて、どこの店でも、翌日からそこで働いていました。リサイクルの店での店員、工場の梱包の仕事、レストランでのウエイトレスなど、いろいろなアルバイトをしました。

アルバイトを続けながら、国際ビジネスの専門学校で二年間勉強して、専門知識を得ました。卒業時には、今後の進路を考えなければならず、帰国か大学に進むか悩みましたが、私は結局、両方とも選びませんでした。同じ台湾人の

友達といっしょに起業しようと考えて、行政書士に相談して、会社を開くための準備に専念したのです。

専門学校卒業後は、友人と台湾飲食店を共同経営し、店長として一年半働きました。そして、さらに勉学を続けたいと考えて、お金を貯めて、現在は、静岡産業大学の三年生に編入し、授業を受けています。

今回、藤枝ロータリークラブの授業で、最も印象に残ったのは、志田洪顯さんの「人はどんな小さいことでも見逃さないで、どんな経験でも積んでゆけば、将来、必ずその経験から得たものを使う場所があります。」という言葉でした。そのときの話が、私の心にとっても響き、ある意味ショックを受けました。勤めていた会社の総務も、いつも同じことを言って私を励まし、指導してくれていたからです。総務は、「自分は総務という立場ではあるけれど、正しいことは正しい、違うことは違うと言ひ、自分が違っていたとしたら、必ず謝ります。」と言いました。今、考えると、総務は素晴らしい人だったと思います。私達が成長するためにも、自分は常にもっと正しくあろうとしていました。同じ女性として、この精神は尊敬に値します。志田さんのお話も聞いて、今海外にいて、日本語も勉強し、社会経験もある私は、自分らしく自信をもって、出来ることを精一杯やればいいのかと考えています。今、学生の私にできることは、学校でしっかり勉強して、様々な活動に参加して、さらに難しい言葉をマスターして、沢山の人と出会うことです。自分の能力をアップさせて初めて、他人を助けることができるのです。

今まで、私を応援してくれた人は沢山います。家族も心から応援してくれて、非常に感謝しています。この感謝の気持ちをもちながら、どんなことでもいいから、皆が幸福で、笑顔でいてもらえるようにこれからも努力したいと思います。自分が幸せになれば、家族や友達も幸せになると思うからです。

現在の社会は、確かに進歩してはいますが、人間同士がお互いに話す機会が少なくなりました。皆がいつも忙しいと言って、笑うことも忘れてしまいました。その結果、自殺する人も驚くほど増えました。それは、家族や友達をより不幸にすることです。私はこんな社会が嫌です。私は今まで、友達に悩みがあったら、それを聞いてあげて、本気で付き合ってきました。私は他人からも頼りにされる人間を目指して生きてきました。自分の将来は自分で作ります。どんなに小さなことでも、チャンスを逃さないようにして生活していきたいと思っています。本気でやれば、何でも面白いのだと思います。